

教員活動状況報告書

提出日：令和 4 年 3 月 10 日

所 属： 生命・環境科学部 環境科学科

氏 名： 片平 浩孝 職位： 講師

役 職：

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

環境生物学研究室所属の教員として、当該研究室で伝統的に継がれてきた衛生動物学及び医動物学分野の教育を引き継ぐとともに、現代のニーズに即した柔軟な教育展開を目指している。

主要な担当科目は学部 3 学科にまたがっており、上述した分野に関わる知識普及および教養の涵養に努めている。なお、近年の環境問題の一つである「生物多様性の喪失や維持」に対する関心の高まりを受け、基礎となる生態学やフィールドワーク関連の科目も担当させて頂いている。

2020-23 年度クラス担任。

科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
衛生動物学(分担)	食品生命科学科	必修	3 年前期	77
食品寄生虫学(分担)	食品生命科学科	選択	4 年前期	82
医動物学・同実習(分担)	臨床検査技術学科	必修	2 年後期	94
地球環境科学(分担)	環境科学科	必修	1 年前期	61
基礎生物学実習(分担)	環境科学科	必修	1 年後期	58
衛生動物学・同実習(分担)	環境科学科	必修	1 年後期	62
フィールドワーク入門(分担)	環境科学科	選択	1 年後期	57
環境生態学	環境科学科	必修	1 年後期	70
地球共生系データサイエンス(分担)	全学共通	自由	2 年通年	7
科学者研究者論(分担)	環境保健学研究科	必修	大学院 1-2 年前期	20

2. 教育の理念（育てたい学生像，あり方，信念）

学びたいことを自らの意思で定めて学ぶ力(あるいはあえて定めないことを選択して学ぶ力)の育成、自主的学びの基礎作りに貢献する。大学卒業後に直面するはずの様々なライフイベントや困難を乗り越えられるような人間力、行動力のある学生を育てたい。

「知る」ことは大事だが、「知らなくてもいいこと」を知ってしまうことで被る「知の不幸」もある。成熟した人間として豊かな人生を送るためには「知の探求」だけでなく、「知ることを選択しない」という高度な選択能力もまた必要である。そのためには自主的な「意思決定の力」を高めなくてはならない。高等教育機関としてそうした技能獲得の機会を提供し、人生を強く生き抜くための礎を提供していきたいとのモチベーションがある。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

基本的に「発達援助」に重きを置くが、学生個人々人によっては得意不得意が予想される。したがって、今後の学びを支える礎となるような最低限の学び、知識獲得の経験もまた重要視する。学びの大小に関わらず、できる限り「学ぶ楽しさ」を意識しながら、各学生の興味の幅を広げるきっかけ作り、将来的な可能性や選択肢を広げるような方向にエフォートを割いている。

具体的には、例えば1) 講義は毎回復習から始め、基礎的な学習を繰り返すことによる知識の定着を図る、2) 小テストには必ず記述問題を入れる、3) 予習に役立つオリジナル資料の提供、4) 時間配分を意識し、気分転換の情報を講義にちりばめる、5) 関連動画の紹介、6) 研究関連では他大学との積極的交流を推奨し、ある程度の裁量を学生にもたせて活動を任せる、などの工夫を試している。

また、現在の義務教育等における「文章を書く機会、書き方を学ぶ機会の欠如」を憂慮し、文章構造や基礎的な「てにおは」を概説し、文章を「書いて」訓練する場をできるかぎり設けていく。

アクティブラーニングについての取組

特に新入生対象を対象とした実習において、コミュニケーションを測れるような余裕のある時間配分とし、大学生生活に慣れてもらうように心がけている。

ICT の教育への活用

教材の電子化、動画配信

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）（分量の目安：15～24行（600字～960字））

現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。

（①から⑤まで個別に記載又は①から⑤までまとめて記載ください）

①教育（授業、実習）の創意工夫（B）

オンラインという特性を逆手にとって、本来であれば呼べない場所にいる外部講師を遠隔で招き、特別講義を実施していただいている。レポートを通じた学生の反応を見る限り、受講の気分転換としてうまく機能していたように思われる。

②学生の理解度の把握（B）

学習状況のこまめな把握のために、学理を利用した自主的なアンケートを実施した。

③学生の自学自習を促すための工夫（B）

講義内で紹介する最新の知見については、文献などの一次情報源を必ず紹介し、利用可能であれば、理解の補助となる動画等の情報も知らせるように心がけた。

④学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（B）

②において実施したアンケートにおいて、適宜回答を提示した。

⑤双方向授業への工夫（B）

可能な場合は発表会を実施し、スライドの内容や発表の仕方について相互評価を導入した。

※A（十分実施している） B（実施しているが十分でない） C（うまく取り組めていない）

5.学生授業評価（分量の目安：4～7行（160字～280字））

①授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

小テストのフィードバックや補足資料の提示に関するタイミングに指摘があったため、応答や提示までのタイムラグをできるだけ無くすように心がけた。

② ①の結果はどうでしたか。

今のところ指摘が見られないため、改善したものと判断している。

③ ②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。

次年度も同様に対応していく予定である。

6.学生の学修成果（分量の目安：4～7行（160字～280字））

①学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

分野最先端の現場にいる若手専門家をオンラインで紹介し、より具体的かつ現実に則した実のある内容の話題提供を頂くことで、学びを身近なものとするよう試みている。

②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

環境生態学(メール一部抜粋)：「片平さま

遅くなりましたが、採点を終了いたしました。

本メールに採点結果を添付いたします。改めて、学生の可能性に気づかされました。どの学生さんも、とてもいいコメントを残してくれており、私の授業のメッセージが学生さんに伝わってくれたようで、非常に嬉しく思います。」

7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）

参加できる時はできるだけ参加するように心がけた。

8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）

教育活動に関する今後の目標を記載してください。短期的な目標と長期的な目標を分けて記載してもかまいません。

短期目標：授業・教育レベルの安定化(内容の充実も含む)

長期目標：理念・姿勢が周りに認知・理解されるようなわかりやすい教員像作り

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ

・他大学学生との積極的な交流機会の提供例

研究室所属学生の数名が企画運営に携わり、事項紹介や研究発表をしている。

<https://mammalreskikaku.wixsite.com/mammal>